日本をキリストへ
協力
37

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会
〒101-0062　東京都千代田区神田駿河台2-1
OCC総動員伝道内
TEL/FAX.03-3291-5035

みな、キリストにあって一つ

伝道団体連絡協議会副会長　村上宣道

「あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つ」（ガラテヤ三・二八）。このみ言葉は、ケズイック・コンベンションの標語になっているが、ケズイックのみならず、キリストにある教会およびその働きにかかわっている者たちの共通のテーマということができよう。では聖書で言っている「一つ」すなわち「一致」とはどのような内容を含むのだろうか。

一　差別なき一致

ガラテヤ書で見ると「キリスト・イエスにあって一つ」というのは「もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない」ということ、つまり人種的な、身分的な、そして性別においても一切の差別が撤廃されている状態を指している。

それを教会という視点でいうならば、教派や伝統や、団体に貴賤の違いなどあるはずがなく、その働きの内容によっても、評価の差別などがあっていいはずがないということになろう。

二　違いを認め合う一致

エペソ人への手紙の四章では、「一つ」という言葉が繰り返され「聖霊による一致を守り続けるように」と促しながら、それは必ずしも画一的であれということではなく、「ひとりひとりに」与えられている賜物や働きを生かすためであるとしている。

小学校の教科書にも載っている金子みすずの詩に「みんなちがってみんないい」というのがある。また、「ちがいのわかる男」というコマーシャルがあったが、一致は互いが違いを分り合える成熟さの中に育つものなのであろう。

三　同じ方向を向いている一致

ある結婚式で「互いにいつも向かい合ってばかりいると、互いのアラばかりが見えてくるかもしれないので、二人が並んで同じ方向を見る、つまり二人ともイエスさまに焦点を合わせて生きるのが大事」というスピーチがあった。

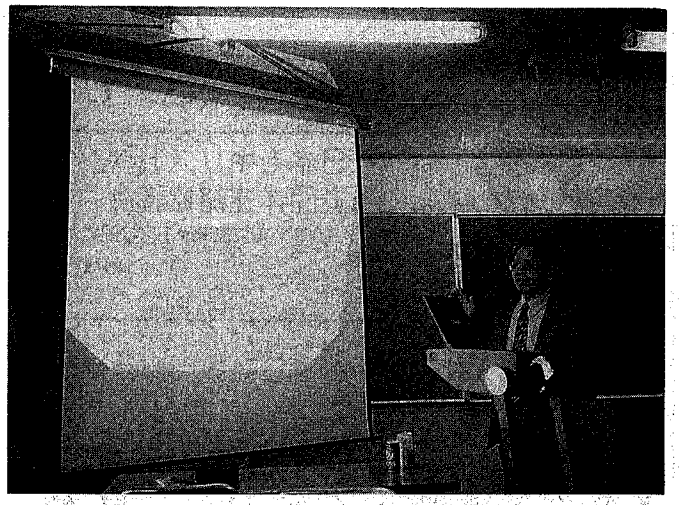
これには異論のある方もあろうが、ともかく私たち伝道団体はセクト主義的な偏見を捨て、互いの違いを尊重しつつ、方向だけは同じ方を向いて手をつなぎ合っていくという一致に、この年一層の内実を期待したい。そのことを誰よりも望んでおられるはずの、キリスト・イエスにあって、それは可能であると信じる。

具体的にはせめてもの、「主の年二〇〇〇年を画期的な宣教年」にしようという目標に方向を同じくし、互いに与えられているエネルギーをそこに結集できたらと願ってやまない。

企業家が観る世紀の転換期をテーマに

一泊研修会もたれる

一月二十六、二十七日の二日間にわたって研修会が代々木にあるオリンピック青少年センターでもたれた。講師はソロモン経済研究所長の中野工氏（バプテスト教会連合・練馬教会会員）。参加者が少なかったのが残念であったが、講演の趣旨をご紹介したい。講演のテーマは「企業家が観る世紀の転換期」。



OHP を使って講演する中野氏

今まさに二十世紀の終わり、二十一世紀に移って行こうとしている転換期である。世紀末にはいろいろなことが起こると一般的に言われているが、評論家が予測できなかった大きな銀行や企業が倒産した。経済界ばかりでなく、政治界、道徳面などなど、まさに激動している。天気の予測ができても「今の時代が読めないのか」と主は言われたが、クリスチャンとして、教会として時代を読みながら、主の業に取り組ませていただきたいと願う。

（以下　中野工氏の講演の要約）

ボーダーレスの時代

今年の日本の動きや状況を的確につかむために正月には有名な五紙を隅々まで読む。変化が激しくて将来を予見することが難しい。しかし、経済の専門家よりもむしろタクシーの運転手の方が時代を感じ取っている。飲み屋からのお客が少ない、高速を使ってくださいと言わない、などから時代を読んでいる。

世界の十大銀行に日本の銀行が七つも入っていたが、今年は十三位にやっと入っている状況である。二〇三〇年には、日本にも昔は力があったねと過去形で語られるようになるだろう。

今までは公共投資による乗数効果があったが、循環不況から構造不況になり、今では銀行への信用がなくなり、心理不況の時代である。すでに多国籍企業がどんどん日本に入ってくるボーダーレスの時代が始まっている。日本国内のトヨタの生産は下降線をたどっているが、海外に工場を持つようになり、業績を伸ばしている。

中高年層へ伝道の好機

日本の人口は二〇〇七年に伸びがストップし、それ以降は下降線をたどっていき、労働力がなくなり、海外からの働き手が日本に入って来るようになる。離婚が増え、二〇一六年には一年間に一五〇万人が死亡する。これからは中高年齢層への伝道の好機である。結婚式が伝道に用いられているように、葬儀が用いられることだろう。

体の一部を子宮に入れることによって受胎することが分かり、無受精の出産が可能であることが判明した。イエスの処女降誕も科学的に論じられ、科学を用いて聖書を批判する時代が来るだろう。

相手の土俵で相撲がとれるクリスチャンでありたい。牧師は仏教や経済の本にも目を通しておく必要がある。三浦綾子さんの影響を一とすると、曽野綾子さんは五、遠藤周作さんは十。立場が違う遠藤さんのキリスト観を知っておくべきである。

ニーズにあった伝道

企業がうまく行くためには、共通の目標を全従業員がもつ必要がある。仕事は分業し、協業しなければならない。そのためにはコミュニケーショ

ンが大切。教会でも同様。

素質に応じて分業させ、給与に不平を言わせないようにするにはリーダーの力量が問われる。この仕事が牧師のすることで、エペソ人の手紙に記されている通りである。また、チッポラがモーセに進言したように組織をまとめるのもリーダーに課せられている務めである。

企業が売りたい物を作って売る（プロダクト・アウト）ように、牧師が言いたいことを説教する時代ではない。人々のニーズは何かを探って物を作り売る（マーケット・イン）ように、ニーズにあった伝道をすべきであろう。人間に与えられているタレントを使い尽くして後は主に委ねて祈ると言うのであればいいが、逃げの方法として祈っているのではないかと感じられる。

今まで、一般的な人は仕事を一生懸命すれば会社は成長し、自分の地位も向上し、給料も増える、そのことが家庭の幸福につながると考えてきた。ところが家庭は崩壊した。人生の目標がどこにあるのかを再確認しなければならない。

これからの世紀には、人口の増大、環境の汚染、陸が海面下に、食料の危機、暴動、イスラムの拡大などが課題になるだろう。

第十一回フェスティバル
一九九七クリスマス・フェスティバル・イン・さいたま開く

今回の第十一回フェスティバルは、「クリスマス・フェスティバル／イン・さいたま」が新しい試みの中に、埼玉県川越（ペペホール・アトラス）で十一月八日に開催しました。ディケンズ・クリスマス・キャロラーズの皆さんのクリスマス・キャロルから始まり、佐藤豊久さんのギターライブ、ザ・ウィングスのクリスマスミュージカル・コンサート。西田正さんの一人芝居。最後は、地元、坂戸メサイヤ合唱団の「長崎殉教オラトリオ」（写真上）と多彩なプログラムでした。またそれぞれの合間に、村上宣道師、姫井雅夫師、池田勇人師のメッセージがあり、クリスマスにふさわしい福音を語っていただき大変好評でした。

いつもは伝団協の働きをお知らせするのが目的ですが、今回は勿論その意味もありますが、新しい試みとして、地元教会と協力して伝道することを目指しました。しかし、地元教会との連携には時間が足らず、経済的には伝団協が負担し、川越、所沢、狭山、入間の地元市民クリスマスの前哨戦的に利用していただき、地元教会にフェスティバルの動員をお願いしました。

本格的な準備に入ったのは、九月に入ってからで、限られた人数でほとんどの準備を忙しい仕事をしながら始めました。展示をしてくださる団体も初めは四、五団体で、どうなることかと思いましたが最終的に二十に近くなり、ほっと胸をなでおろし、各団体の協力に感謝いたしました。地元の教会を始め、一般の方々にも、宣伝がなされ良かったと思っています。延八百五十人の方々が参加されました。親子連れ、一般の方々、教会員の方々から「ありがとうございました」などと声をかけられ、多くの方々に喜んでいただけたと感謝いたしました。

準備不足を痛感しましたが、この機会を通して、一人の方でも教会に導かれ、イエス様に出会い、救われたとしたらこんな大きな喜びはありません。

参加された方々、一人一人の魂を主はご存知ですから、これからも必ず導いてくださいます。

特に地元の先生方には、大変お世話になり、ご協力をいただき、またそれぞれの立場でご協力くださった伝団協の皆さんに心から感謝もうしあげます。

（浅見鶴蔵）

クリスチャン新聞
一九九七年11月23日号より

クリスチャ

（日曜日）

イギリスの伝統的衣装に身を包んで賛美するクリスマスキャロラーズ

ひと足早いクリスマス

ひと足早いクリスマスが埼玉県にやって来た。十一月八日、西武本川越のペペホールで開かれた「クリスマスフェスティバル・イン・埼玉」は、キリスト教の伝団協（伝道団体連絡協議会）が主催、地元の川越、所沢、狭山、入間の教会が行っている市民クリスマスに参加を呼びかけ、一般にアピールした。

午前は、イギリスの伝統的衣装でクリスマスソングを歌うクリスマスキャロラーズの賛美、クリスチャンギタリスト佐藤豊久さんの演奏などで、クリスマスの喜びを表し、午後のプログラムでは、子ども聖歌隊ザ・ウインズのクリスマスミュージカルコンサート、坂戸メサイア合唱団の長崎殉教オラトリオが演奏され、合間に、ひとり芝居「クリスマス・キャロル」が西田正氏によって演じられた。

会場は舞台と観客が一体となれる作りで、左右に各団体の働きを知ってもらおうと、これまで東京や岡山、神奈川などでフェスティバルを開催してきたが、今年は「クリスマスの前哨戦」として音楽と劇を主体としたプログラムで埼玉にある教会に設け、地元のクリスチャンにその働きをアピールしていた。

伝道団体連絡協議会

顧　　問：岡村又男、堀内　顕、K・マクビーティ
名誉会長：本田弘慈
会　　長：羽鳥　明
副 会 長：原　登、村上宣道、多胡元喜
役　　員：岸田　馨、滝元　明、姫井雅夫、鈴木留蔵、浅見鶴蔵
常任役員：渡辺佐次郎、鈴木優子、鈴木繁、中川信義、寺田　勇、竹原淑夫、岡田哲夫
監　　査：辻岡健象、当真節子

発行日　一九九八年三月二十日
発行者　羽鳥　明
編集者　鈴木　繁